

巻頭写真 青森平野南部の大矢沢における後期第四紀の大露頭

Large Late Quaternary outcrop at Ooyazawa in the southern part of the Aomori Plain

青森平野南部の大矢沢において、後期更新世から完新世の植物相と植生変遷だけでなく、植生史研究の方法を開発する上でも有意義な露頭が確認され、長く保存されることになった。この露頭は、青森平野の中央部を北に流れる横内川の水害を防ぐために作られた遊水地の全面である。遊水地は現在の地表から約6 mも掘り下げられており、この底面と周囲の壁のすべてが露頭ということになる。遊水地は上池と下池の2つからなるが、このうち上池には、約25,000年前と約13,000年前の当時の地表と埋没した森林が確認され、さらに更新世末に形成されたと見られる谷とそれを埋積する泥炭層が確認された。このように後期更新世から連続した堆積物が確認できること、その中にはそのまま埋没した森林が複数の層位にわたって広がっていること、それらの規模がこれまでにない大きなものであることから、学術的価値や活用性についての基礎的な調査が実施され、その結果を踏まえて長く保存されることが決定した。このような重要性が確かめられたのは1999年3月末であったが、4月から始まった基礎的な調査の期間中、まだ草の覆いや地表の風化が進んでいなかった5月15・16両日に日本植生史学会の談話会を開催し、二日目の16日に上池を見学したので、参加者はさまざまな記録を残している。

写真は、上池の南部を北方から見下ろしたもので、ヘリコプターから撮影したものである。規模が大きいので、地上を歩いていたのでは、このようなダイナミックな状況は確認しにくい。この一帯は更新世末期に形成された扇状地の地形面が残っており、上池の底面には、この堆積物が広く露出している。写真で明るく見えるのがそれである。写真の左手(東側)の黒ずんだ部分は約25,000年前の埋没林が露出する。右手(西側)には南北に刻まれた谷とそれを埋積する真っ黒な泥炭層が露出し、南の壁に横断面が見える。この谷より東側の南の壁には、約13,000年前の十和田火山を給源とする八戸火砕流に覆われた埋没林が約400 mにわたって露出する。現在、青森県は保存と公開活用のための検討委員会を設置し、保存と活用の方

(辻 誠一郎 Sei-ichiro Tsuji)

